
月から来た少女 イナイレ

うむうむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月から来た少女

イナイレ

【Nコード】

N8583Y

【作者名】

つむつむ

【あらすじ】

雷門中学にやって来た転校生

月影四季菜

彼女にはある秘密があった

月から来た少女 イナイレ

私は月から来た

いつか

かぐや姫のように

帰らなくてはならないのだろうか

やがて

FFIも終わり

桜の季節がやってきた

田堂達は三年生になっていたー

円堂 「今年も同じクラスなんてな よろしくな
? (ニカッ)」

豪炎寺 「ああ、俺の方こそよろしくな (微笑)」

鬼道 「お前達と一度は一緒のクラスになりたいと思って
いた 楽しみだな (フツ)」

ガラガラッ? ピシヤリ?

先生 「おゝい みんな 席に着け? 今日
は転入生を紹介するぞ」

男子ABC 「おお〜!。...* かわいい女だといいな
? ?」

女子ABC 「ええ〜!!? イケメン君がいいな?
(つてかこのクラスにはすでに鬼道、豪炎寺のイケメンコンビ
がいるけどお (キヤア))」

男女ABC 「先生、どっちですか?!!?」

先生 「女生徒だ、月影、入りなさい!」

四季菜 「月影四季菜です...よろしくお願いします」

全員 「……………かわいい……………くない……………」
ッ
（ ……ガク

皆にそう思われるのも無理はない

なぜならそこに立っていた四季菜は 真っ黒な

髪をきつちり三つ編みお下げにし、牛乳ビンほどの厚底眼鏡をかけていたからだ

その見た目は かわいい からは到底かけ離れていた

先生 「席は学級委員の近くがいいからな、お？ 鬼道の前が空いてるな、月影、あの席へ座りなさい」

「はい」 四季菜はそう言つと席まで歩いていった

後ろの鬼道が話しかける

鬼道 「学級委員の鬼道有人だ、分からない事があつたら何でも聞いてくれ」

四季菜 「はい…」

豪炎寺 「豪炎寺修也だ よろしくな」

隣の席に座っていた豪炎寺もあいさつをしてきた

四季菜 「…よろしく…」

（ 暗い女だなあ… ） 鬼道と豪炎寺はもうコイツには自分から話しかける事はないだろうと思つた

下校時間 キーンコーン

円堂 「月影え？(^o^)」

四季菜 「はい…？」

円堂 「よろしくなっ 俺、円堂守？ サッカー部の
キャプテンやってるんだ？ 月影は 部活は何か決
まってるのか？ よかったら一緒にサッカーやらないか？
(ニツ」

鬼：豪 (。 。 111(汗)ゲツ？ マジかよ？

四季菜 「悪いけど、サッカーなんて全く興味無いんで遠慮し
ときます」

四季菜は愛想笑いもせず淡々と断った

円堂 「？ あれえ お前なんかサッカー好きなんじゃな
いかな？なんて気がしちゃったんだよね、勘違いだったか、ゴメン
な／／／ まあでも、いつでも気が変わったらきてくれよな
！！！」

円堂はそう言つとその場から去って行った

鬼道 (どこがサッカー好きそうに見えるというんだ(。 。 ;
やっぱりアイツは天然だな…)

豪炎寺 (本当に円堂のヤツ… 誰でもとりあえず誘うんだ
から困ったもんだ 俺や鬼道目当ての女とか断るのに大変だ
つたんだぞ？ 俺達の苦労も知らないで…)

二人はとりあえずホッとしていた

帰り道――

四季菜は一人考えていた

（ アイツ…何で私がサッカー好きだって分かったんだらう…？
フツ 円堂守…か どんなヤツなのか少し調べてみるか…
… ついでに鬼道と豪炎寺の事も…同じサッカー部み
たいだからな ）

私がこんな格好をしてるのも

全ては人を寄せつけないため

ああ サッカー やりたいなあ

でもそんな事したって…私は…

その後

とある数学の授業時間

先生 「この問題はちょっと難しいぞ」 誰か解ける者？

？……………何だ誰もいないのか？鬼道、お前はどうか？」

鬼道 () 学年トップの意地としてここはあざやかに解いてみたいもんだが…)

「すみません、時間をかければ解けそうだと思うんですが…」

先生 「そうか、では月影！ 転入生の試練だ(笑) 出来る所までやってみなさい」

四季菜 「…はい…」

四季菜は席を立つと黒板の前に行った

そしてチョークを手にしたかと思うと糸も簡単に計算式や数式を書いていった

男子A 「あんな式、習ってね〜ゾ??」

女子A 「間違っ書いてんじゃないの?」

皆きよんとしていた

先生 「おいおい? その計算式は中学では習わないぞ?
お前どこで教わったんだ? もっと簡単な式で書いてくれ!」

四季菜 「すみません、失礼しました…」

四季菜はそう言つと全てを消して一から書き直し始めた

鬼道 () 全部消すなんて…? 問題の数式も全て頭に入って

いるというのか…?)

先生 「ご名答? 良く解く事が出来たな よし、席に着いていいぞ」

豪炎寺 「頭はいいみたいだな」

鬼道 「ああ、いいライバルになりそうだ (ニヤリ)」

しかし体育の授業ともなると四季菜は全く目立たなかった
球技ではボールにふれる事すら出来ず 陸上なんかはいつも最後の
方のタイムだった

豪炎寺 「あいつ、運動神経は良くないみたいだな」

鬼道 「ああ」

だがこの二人の考えは間違っていたことになる

それは放課後のこと

円堂達三人は部活を終え、帰り道を歩いていた

円堂 「…なあ、あそこにいるの 月影じゃないか?」

豪炎寺 「本当だ、あんなとこで何やってんだ??」

四季菜は路地の端で一組の親子と話をしていた

女の子 「うえくん!! うえくん!! (泣)」

母親 「あんな高い所に引っかけたはもう取れないのよ、あきらめなさい ちゃん」

どうやら女の子は風船を目の前の高い木に引っかけてしまったようだ
あきらめきれないといった様子でずっとその場から離れない

四季菜 「……おばさん、ちょっとこれ持って??」

四季菜はそう言つと自分の通学カバンを母親らしき女性に手渡した

鬼道 「あいつ、何やるつもりだ??」

四季菜はいきなり風船が引つかかった木に登り始めた
そしてあつという間に上の方へたどり着くと引つかかっていた風船
を自分の方へたぐり寄せた
次の瞬間————!!!

一番上から二回転半位のジャンプをして地面に着地した

円：鬼：豪 「……なつ!!!!!!」 (驚)

円堂 「スツゲえええー? (;) (;) (;)
あんな高い所からジャンプしたよ ……つハハツ!!!」

四季菜はだまつて風船を女の子に手渡した

母親 「すごい? 本当にどうもありがとうございます?」

「?

女の子 「お姉ちゃん? どうもありがとぅ!?!?!」
親子は深々とお辞儀をすると歩いて行った

その後ろ姿に四季菜は手を振っていた

鬼道 「運動神経が無いとは思えないな……?」

豪炎寺 「一体どういうことなんだ…?」

円堂 「おお〜い!?! 月影え〜!?!」

円堂達は四季菜の元へ駆け寄った

四季菜 「!?! タイミング悪っ 見られたか…… (汗)

円堂 (目がキラキラ 「今のすごかったな?? やっ
ぱり俺の目に狂いはないっ! 一緒にサッカーやろうぜ!?!」

四季菜 「何度も言うけどそのつもりはない!! もう私に構
わないで??」

四季菜はその場を立ち去ろうとした

鬼道 「待てっ!」 鬼道は四季菜の腕をつかんだ

四季菜 「痛いっ? 離して??」

振りほどこうとするが鬼道はがっちりつかんだ手を離さない

鬼道 「お前、何か裏がありそうだな、何故運動神経がいいのをわざわざ隠している？」

四季菜 「フツ…さすが天才ゲームメイカーさんね

、勘が鋭い…」

「私はあなたの事知ってるけどね」

鬼道 「？…」

四季菜 「鬼道有人… 幼少からサッカーの才能がズバ抜けており影山零治に見出される

その後鬼道財閥の跡取り息子となる

サツ

カー界において常に冷静な司令塔をこなし天才ゲームメイカーと呼ばれる 但し影山に翻弄された時や妹の音無春奈が関わりと判断を見誤る傾向あり」

鬼道 「お前…？ どうしてそれを…？」

鬼道は四季菜から手を離れた

四季菜 「まだ知ってるわよ 豪炎寺修也

同じく幼少の頃よりサッカーの才能を開花させ天才エースストライカーと呼ばれる

鬼道と同じで妹の豪炎寺夕香が関わりと

冷静さを失う」

「最後に円堂守… 幼少期に祖父のサッカーの秘伝ノ

ートを見つけそれ以来サッカーの虜となる 努力は

人一倍 それに伴い根拠が無くても人に対し常に信頼

をおく その為信頼をおかれた者は心を開く事とな

り今では多くの者が彼に絶対的信頼を持っている

中でもその二人は特に…ね？

「フッ」

豪炎寺

「お前…何者なんだ…？」

四季菜

「ちょっと調べればすぐに分かる事よ、でも安

心して

私はあなた達の邪魔をするつもりなどこれっぽっちも

ない

ただ毎日平穩に過ごせばいいだけ

だからもう私に話し

かけないで？」

四季菜はそう言つとそこから去つて行つた

謎の少女月影四季菜

あいつの正体は一体…？

昨日あのようなやりとりがあつたにも関わらず四季菜は何事も無かつたかのように授業を受けていた

円堂達も話しかける事は出来なかった

今まで四季菜に目もくれなかった鬼道が今日は後ろの席からじっと見つめていた

鬼道 (左手首が少し赤くなっている…)

昨日

俺がきつくつかんだから… 何だか少し悪い事したな…

こいつ…よく見ると髪が綺麗なんだな、手も細くて雪みたいにも色も白い

少し覗いてるうなじはもっと透明感がある

眼鏡を取ったら、素顔はどんなヤツなんだろう…？ (

豪炎寺も同じ事を考えていた

豪炎寺 (こいつ…よく見ると爪の先まですげえ綺麗だな、今

まで気付かなかった　耳も
真っ白で小さくてかわいいな…
素顔も…見てみたい　)

鬼　：　豪　　(　はっ？／／／／俺は何を考えてるんだ？
どうかしてる？　)

四季菜は二人の視線に気付いていた

四季菜　　(　マズイ…　二人が私に興味を持ち始めてる…
)

四季菜　　「先生　！！」

先生　　「　どうした、月影　??　」

四季菜　　「私、また視力が悪くなってしまって…ここからじゃ
黒板の字が見えないんです　！　一番前の席にして下さい　！」

先生　　「　そうなのか、うん…　一番前の席といっても空い
てないからな…　誰か代わってくれる人、いないか？　」

前列に座っている女子全員　　「　はいっはいっはっい
！！！！？　」　手を上げた

「　鬼道君や豪炎寺君とお近づきになれるならっつ？　い
くらでも？　」　)

鬼　：　豪　　(　…　)

四季菜　　(　よしっつ？　)

鬼道 「先生！」

先生 「何だ、鬼道？」

鬼道 「月影には今色々学級委員として教えている最中なんです、彼女がスムーズに学校生活に馴染めるよう、僕も責任を持ってやっているつもりです、視力が下がったと言うならそれに見合った眼鏡を一緒に探しに行ってください…
なので席はそのままお願いします（キリッ）」

先生 「そ、そうか、分かった（^^；；；）」

鬼道がそこまで言うならそうしよう

と、いうワケだ、月影、早く新しい眼鏡を買って来いよ」

女子全員 「チエツ？」

四季菜 「学年トップだからって先生も言いなりかよ？」

あゝ やだ、もう」

放課後――

四季菜 「ちょっと！ さっきから何でついてくんのよ！！」

鬼道 「言っただろう？ 新しい眼鏡を一緒に探しに行くって

… (ニヤリ)

四季菜 「眼鏡なんか買い替えないわよ、視力が落ちたなんてウソなんだから」

鬼道 「やはりな…フッ」

四季菜 「だいたい何で後ろの二人までついてくんのよっつ！
おかしーでしょーが??」

円堂 「ええっと…あのう…えへっ(汗)」

豪炎寺 「……………(――;)」

円堂 「いやあ俺達、お前の正体気になっちゃってさ(焦)いい加減教えてくれないかな？」

鬼道 「はっきり言おう まずはお前の素顔が見たい」

豪炎寺 「同じく…」

四季菜 (変態…(^^;;))

円堂 「俺達昨日あの後さ、どうしてもお前の事知りたくて理事長の娘の夏未に頼み込んで調べてもらったんだ、そしたら学校に提出された書類に書いてあったような履歴や経歴は全く無い事が分かったって…全てウソ…なんだろ？
なあ、何でなんだ？

俺達で力になれるなら、話してくれないか?!」

四季菜 「…………誰に話しても何も解決しない…………何も変わらない、変える事なんか出来ないっつー！！
…ウソをついていんだから私はもう退学ね、
皆さん、さようなら ！！！」

やっぱり私にはー

希望なんか……………ないー

「待つんだ ！！！」

四季菜 「…………鬼…………道……………………」

円：豪 「！！！」

俺は四季菜をとっさに抱きしめていた

鬼道 「す、すまないっ…………… ついつ？
諦めないで、話してくれないか？」

鬼道は四季菜から離れた

お前の心の闇を…………俺ははらしたい…

田堂 「諦めたら、そこで終わりだ
諦めない限り、終わりはない？ (ニッ)

豪炎寺 「フツ…諦めの悪い所が俺達のモットーだ？」

四季菜 「!!!!!!!!!!!!!!……………」

もう一度……

あがいてみても

いいのかも知れない……

私は心を決めた

四季菜 「話を聞きたいならついてきて」

四季菜は細い路地に入ると二つ目の角を曲がった

円堂達はすぐ後ろを歩いて行った

しばらく歩くと一軒の家の前まで来た

円堂 「ここは？」

四季菜 「私の家よ 遠慮は要らないわ、上がった

」

円： 鬼： 豪 「お邪魔します？」

四季菜 「そんな大きな声で挨拶したって誰も居ないから」

円堂 「 家族は？出かけてるのか？ 」

四季菜 「 父親は亡くなった… 母親は仕事で海外にいるし兄弟も居ないから私一人よ 」

鬼道 「 結構広い家だな、ここにお前一人だけで住んでいるのか…？ 」

玄関からリビングへ続く廊下の壁には使い古しのサッカーボールがネットに入って掛けられていた

見た所ドアがいくつもあり部屋数は多そうだ

豪炎寺 「 サッカーボール…これ、お前のか？ 」

四季菜 「 (コクン…) 昔はやっていたからね 」

鬼道 「 幾つ部屋があるんだ？ 」

四季菜 「 八つ…でも実際使ってる部屋は半分だけ…母がこつちに戻った時に使う二つと私が使っている二つ 」

円堂 「 あれ？ ドアが開いてる、この部屋は？ 」

四季菜 「 ああ、そこは私のアトリエよ 絵を描くのが好きなの 」

鬼道 「 水彩画、それに油絵もあるな？ どれもすごいな…？ これだけのものが描ければ賞も総ナメだろう？ 」

四季菜 「コンクールに出した事は一度も無いの……だから賞なんて何にも取ってないわ（微笑）」

円堂 「何でこんなに描いたのに出展しないんだ？自分の実力を試したくならないのか？」

四季菜 「私には時間が無いの 賞なんか必要無い、好きな絵を描ければそれでいいの」

四季菜はさみしそうな感じで下を向いた

四季菜 「まあ、とにかく座って、今お茶入れるから、みんな、冷たい麦茶でいい？」

円： 鬼： 豪 「あ、ああ……」

みんなー黙って麦茶を飲んでいた
沈黙が続く中、端を発したのは四季菜だった

四季菜 「さあて、何から聞きたい？」

月から来た少女 イナイレ 第三章

鬼道 「 聞いたら何でも答えてくれるのか? 」

四季菜 「 覚悟は出来てる 」

豪炎寺 「 ならまずは俺から聞く… 」

お前、どこから来たんだ? 前はどこに住んでいた? 」

四季菜 「 私は……………月で……………産まれたの 」

円: 鬼: 豪 「 ……!!! つ…月イ…? 」 (驚)

四季菜 「 1960年代に人類が初めて月面着陸したのは知ってるわよね? 」

実はそれには続きがあつて70年代、80年代、90年代と極秘の国家機密で人類は何度も月に降り立っているの……………」

鬼道 「 確かにあれから人類は月に行こうとしていないのは俺としても疑問はあつた 」

だが何故極秘で行っているんだ? 目的は何だ? 」

四季菜 「 目的? 答えは簡単よ、人類移住計画、まずは科学者から行って地固めをするってわけ… 80年」

代からは地下に大型都市まで出来上がったわ

私の両親は二人共NASAに勤める技術者だったの

二人共月に派遣されて月で年月を過ごすうち……………恋に落ちた……………そして産まれたのが私ってワケ 」

円堂 「何で人類が移住しなくちゃいけないんだ？」

四季菜 「地球の寿命は限られてる……温暖化によってね、地球が無くなるのはまだまだずーっと何百年も先だけどその時に備えていたのよ、でも……」

豪炎寺 「でも……？何だ？」

四季菜 「私が10歳になるまでは、毎日がとても楽しかった、人口も5000人位に増えて、サッカーチームもあつたりして……充実していた、幸せだった

でも私が10歳になったある日、一人の独裁者が生まれたの、彼に洗脳された人は彼の命令に服従した、洗脳されなかつた人もいたけど、彼等が恐ろしくてみんな、言いなりだった……

大好きだったサッカーも娯楽なんかと禁止された……
そして私が12歳の頃私の父親が監視の目をかいくぐって地球にSOSを発信したの

すぐに地球から私達を助け出す為にスペースシャトルがやって来た
私達は急いでそれに乗り込んだ
……でも……父は……他の人達を先に乗せる為に……自らが彼等の……盾になつて……殺された……
うっ……うぐっ……ひっく……
私と母は……父を残して自分達だけ……ううう……」

円堂 「……そんな事が……あつたなんて」

鬼道 「……辛い思いをしたんだな……」

豪炎寺 「何てヤツだ…絶対許せねえ…!!」

円堂 「月影、自分を責めちゃダメだ？」

お父さんは自らの命を懸けてまでお前とお母さんを守りたかったんだ、助かって欲しかったんだ？ きっとお父さんはお前が落ち込むのを見たくなんてないはずだ？ そうだろ？

鬼道 「俺もそう思う」

豪炎寺 「ああ？ お前は父親の分まで幸せにならなければだめだ？」

四季菜 「みんな…ありが…と…」

私は涙を拭いた

「でも私は幸せになる事は出来ない…」

豪炎寺 「？ 何故？」

四季菜 「月から逃げ出すあの時…あの男は言ったの…私が15になったら迎えに行くと…」

私はきつと逃げられない…どこにいてもあの男は私を見つけ出す

……

怖いの…毎日が…こんなに変装して、世界中を逃げ回っていたのに…何をしていてもあの男の言った言葉が頭から離れない…???

鬼道 「15になるのは…いつなんだ…？」

四季菜 「あと一ヶ月きつたわ…」

母は今NASAにいるのー
もし月から不穏な動きがあったらすぐに分かるように監視してくれ
てる

日本ではJAXAの人が見守ってくれてる

でも…それでも怖いの…

だから、私に未来はない、分かったでしょ？

これが本当の私

月から来た少女 イナイレ 第四章

く 鬼道の気持ちく

俺はコイツを守りたい

胸から熱い何かが込み上げる

何故こんな気持ちになるのだろう

昔の心を閉ざしていた頃の俺に似ているからだろうか

いや、違う

もつと何か

まさか

恋……？

まさか…な

まだ素顔も見てないっていうのに…ありえない

でもこの気持ちの高ぶりは何なんだー？

く 豪炎寺の気持ちく

鬼道がめずらしく動揺している

そついう俺もかなり動揺している

コイツをこれ以上悲しませたくない

何とかして安心させたい

何だろうなこの熱い思い

まさか好き…にでもなつたとか？
まさか

そんな事はないだろ
だが

この胸を締め付けられる感じは何なんだー

鬼道 「俺がお前を守ってやる…!!」

豪炎寺 「俺も守るぜ…!!」

円堂 「俺達は昔宇宙人と戦った事もあるんだぜ??

月だか何だか知らないけど、絶対にお前の事、守ってみせる…!!
!!

もつと信用しろっつ 俺達を? (ニヒツ)

四季菜 「ありがとう…私…ずっと誰かにそばにいてもらいたかったのかもしれない…
そばにいる人に…守ってやるって言ってもらいたかったんだ…きつと…:う、う、うわあああん(大泣)

四季菜は円堂に抱きついた

鬼: 豪 「?!えっ?」

円堂 「///えっ?…///あの…ちょっと…///
「お、俺 こーゆーの慣れてなくてさ、ごめんなっつ (照)」

四季菜 「うっん、いいの、こっちこそゴメンね…」

四季菜は円堂から離れるときちゃんと涙を拭く為に眼鏡を外した

鬼道 (もしや素顔…が…)

豪炎寺 (見える…?)

四季菜は二人に背を向けたまま、こう言った

「私の素顔…見たい？」

円：鬼：豪 「あ、ああ、もちろん！！」

四季菜 「…見せてもいいけど、ひとつだけお願いがあるの

」

鬼道 「何だ？」

四季菜 「私の事…好きにならないって約束して」

円：鬼：豪 「……！！！！……」

四季菜は三人の方に向き直った

大きく開いた漆黒の瞳 中心は宇宙の青さのように無限の奥深さがあった

長いまつ毛は瞬きする度にふわっと揺れ、より一層魅力的にするのであった

バランスのいい鼻、愛らしいピンクの唇

この世の者とは思えない程の美少女だった
美しかった

鬼道も豪炎寺も自分の心がとろとろに溶けていくのを感じた

鬼道 「まさに かぐや姫だな」

豪炎寺 「支配者が狙うのも無理はないな……」

だが四季菜に言われたんだ、惚れるなど……

四季菜は分かっているんだ、自分には男を虜にしてしまう力がある
のだと……

俺達はこの気持ちを抑えなければならない

鬼道 「お前は今日から俺達の……仲間だ……」

豪炎寺 「俺にとってもお前は大事な仲間の一人だ、仲間の
事は必ず守る……」

胸が……締め付け……られる

息をするのが……こんなに……苦しいなんて

だが俺達は……仲間として……お前を守る……！！

月から来た少女 イナイレ 第五章

鬼道 「 月影、悪いが電話を借りるぞ？ 」

四季菜 「 あ、うん、どうぞ？ 」

鬼道は別の部屋へ出て行った

円堂 「 月影、良かったら…今から河川敷にサッカーしに行かないか?? 」

「 人生前向いて歩いて行くぞ ! 」

四季菜 「 うん、そだね… 」

私はまだまだ不安が一杯渦巻いてるけど、でも円堂君達に支えられる事によって新たな一步を踏み出せそうな気がする……

立ち止まっただけは…ダメだ…

今を精一杯生きよう

鬼道 「 すまない、待たせたな 」

円堂 「 どこに電話してたんだ? 」

鬼道 「 父さんと話した後 引越し業者にも連絡していた 」

豪炎寺 「 引越し業者 ? 」

鬼道 「ああ、俺は今日からここに住む？」

四季菜 「?? ええええええっ?? なっ何言ってるの??」

鬼道 「俺は本気だ、一緒に居れば何かあってもすぐに駆けつけられるだろう？」

使っていない部屋もたくさんあるみたいだしな、後で業者が家具を運びに来るから」

四季菜 (さすがは金持ち息子、電話一本でどうとでもなっちゃうのね)(^^;;)

「でもいくらなんでも一つ屋根の下に他人の男女はマズイ…んじやないかな…?」

鬼道 「それは気にするな、何故なら俺とお前は 仲間、なんだろう? (ニヤ)」

四季菜 「何かさっきの事を逆手に取られてるような気がする…////」

でも、きっと何もしないよって…事だよな?

鬼道 「お前達はとうするんだ?」

円堂 「うちは…多分…母ちゃんに許してもらえねえな(^^;; ; 「

豪炎寺 「俺も敵しいな…」

鬼道 「そうか、残念だ (ニヤニヤ)」

四季菜 (。°。111) () だから最後のニヤニヤ何な
んだって……?)

田堂 「鬼道、親父さんに…何て言ったんだ？」

鬼道 「全力を尽くして守りたいヤツがいるって言ったら理
解してくれた」

今のって…仲間だからって事だよね？

てか私馬鹿なんじゃない？

期待しないでいいように自分から

予防線を張ったのに——

田堂 「よぉ〜し、じゃあ 河川敷、行くか？」

四季菜 「行くっ?？」 (変装してかなくっちゃ?)

〜河川敷〜

田堂 「ようっ、月影っ 思いきり俺に向かってシユ
ートして来い！……！」

お前の全てを受け止める　！！」

久しぶりだな、ボールに触れるの…

そうそう、この感覚…

蹴り足に力が宿って行くような、この感じ
右足にどんだんパワーがみなぎってくる

……

今だ　！！！！！

ドゴオオオオオオーッッ！！！！

円堂　「ゴッド…キャッチ…Gファイ…
うわあああああーっっ」

豪炎寺　「なっ？」

鬼道　「ゴツドキャッチが…破られた…だと？」

円堂　「うはっは？　すごい威力だった…

なあなあ、必殺技とかあんのか？　やっぱり」

四季菜　「必殺技は……ないっ！！」

円堂　ズルッ　ズッコケた音
「ま、まあいつか、十分威力あるからな」

鬼道　「次は俺達からボールを奪ってみろ？」

四季菜 「分かった、行くよ？」

豪炎寺が最初にドリブルを始める

四季菜が前をふさぐ

前からボールのある右側へとまわる

豪炎寺 「フツ 甘いな、」

豪炎寺は四季菜と反対側にいる鬼道にパスを繰り出す

豪炎寺 「鬼道？」

ズバツ！！

豪： 鬼 「何イ？」

何と四季菜は瞬時に鬼道のいる方へと移動していたのだ
そして鬼道に渡るはずのパスを見事にカットしていた

鬼道 「もらったー??？」

鬼道が素早くスライディングをしてきた

四季菜はギリギリのところまでボールをヒールで跳ね上げ、ヘディングで円堂の前まで来た

胸でボールを拾うと落ちて来たボールにそのまま回転かけシュートの態勢に入った

四季菜 「行くよ？円堂君！」

円堂 「よし！ 来い！」

四季菜は大きく、高く足を振り上げた

そして、大きく蹴り上げた

円堂 「うおおおおー……お？」

円堂は大きく右に飛んでいた

それを見た四季菜はニヤリと笑い軽く左にフェイントを入れた

ボールはゴールへと静かに入って行った

円： 鬼： 豪 「参りました？」

四季菜 「宇宙人をなめんじゃないよ？（笑）」

鬼道 「じゃあそろそろ、俺達は帰るぞ、家具が来るからな
行くぞ、月影っ」

円堂 「楽しかったな、またサッカーやろうな？ 月影??？」

豪炎寺 「変なコト、すんなよな／／／？」

四季菜 「だっ大丈夫だからっ／／／じゃあね」

四季菜と鬼道は四季菜の家に向かって歩き出した

何か不思議

守ってくれる人がそばにいるだけで

こんなにも落ち着くなんて

何年振りだろう、この安心感

不安が全部消える事はないけど

氷の世界に突然現われた小さな炎

世界を溶かせるワケではないけど

近くに居ればあたたまる

例えていうならそんな感じ

ありがとう、鬼道君、

背中が頼もしく見えるよ

月から来た少女 イナイレ 第六章

〔四季菜の家〕

リビングのダイニングに座る四季菜とはす向かいのソファに座る鬼道

四季菜 「ホントにここに住むつもり？」

鬼道 「でなければ今ここにいないさ」

業者 「ピンポン」

業者 「運送です？」

鬼道 「来たな！ ガチャッ」

「ご苦労様、案内する部屋に運んでくれ」

四季菜 「……………つつ？」

私の隣の部屋？ 奥の部屋の方が広いつて？」

鬼道 「何かあった時すぐに駆けつけなければ意味が無いだろう？」

四季菜 「それは…そうだけど… (寝る時も薄壁一枚だけなんて… / / / / 意識しちゃうじゃない / / / / /)

「…ってというか、ベッドでかつ？ ……もしかキングサイズ…？」

鬼道 「当たり前だ、何か可笑しいか？」

四季菜 「(^^;;」

いえ、何も……」

運ばれたのは馬鹿でかいベッド、クローゼット一式、勉強机、書庫などだった

へえ

インターネットで済まさず、きちんと本を読む人なんだ
さすがは学年トップ

引越しの片付けが終わった

鬼道 「こんなに遅くなってしまったな、
何か飯でも作るか？」

四季菜 「あ、私が作るよ！ (一応女の子だし)

鬼道君はお風呂でも入って来て」

鬼道 「…ならその言葉に甘えて遠慮なく」

鬼道は身支度を済ませるとバスルームへ向かって行った

四季菜 「よし、あとサラダを盛り付ければ出来上がり」

ピーンポーン

こんな夜遅く誰だろう？

四季菜はインターホンの受話器を取った

四季菜 「…はい、どちら様ですか？」

豪炎寺 「……俺だ……」

四季菜 「豪炎寺君？？」 あ…今開けるからちょっと待ってて？」

豪炎寺 「ああ、」

四季菜は玄関のドアを開けた ガチャッ

目の前には大きなスポーツバッグを持った豪炎寺がいた
ジヤージから着替えてきたらしく私服の白パーカーにオレンジの上着を羽織っていた

シャワーも浴びて来たのだろう、栗色の髪は少し濡れており、外の風に乗ってシャンプーのいい香りがしていた

四季菜 (私服姿もやっぱりカッコいい……さすがは学年一のもの男ノノノ)

「どうしたの？ こんなに夜遅く……それに、その荷物は？」

豪炎寺 「……その…俺もここに住む…から……」

豪炎寺は顔を赤らめて言った

四季菜 「ノノノノえっ、えっ？ 何で豪炎寺君まで
？ いいって！！マジで！！」

豪炎寺 「俺はお前を守ると決めた、これは俺の気持ちの問題なんだ！」
邪魔するぜ？」

豪炎寺は勝手に靴を脱いでリビングまでスタスタ歩いて行った

四季菜 (ここ……私の家なんですけど……(^^;;

勝手にそーゆーの、きまつちゃうんだ)

豪炎寺は鬼道の向かいの部屋を指差しー

豪炎寺 「この部屋借りるぜ？」
寝床はリビングのソ

ファでいいから……

お前、飯作ってたのか？」

四季菜 「あ、うん、
豪炎寺君はご飯食べた？」

「

豪炎寺 「ああ、食って来た

でもお前の飯、うまそうだな、少しもらっていいか？」

四季菜はすごく嬉しくなった

料理を人の為に作ったのは初めてだった

ご飯を食べて来たにも関わらず 豪炎寺は食べたいと言ってくれたのだ

四季菜 「じゃあ、あとサラダを盛り付けるだけだから、待ってて？」

豪炎寺 「それだけなら俺がやってやるから着替えてきたらどうだ？」

四季菜 「　　ありがとう、優しいんだね、豪炎寺君…」

豪炎寺 「　　／／／／　　礼を言われる程の事じゃないさ」

四季菜はエプロンを外すと自分の部屋へ入って行った

）　豪炎寺の気持ち　（

女のエプロンって何かいいな…

死んだ母さんを思い出す

やっぱり鬼道と二人暮らしなんてさせられない

彼奴には隠れ悪魔がいるからな

何をしでかすか分からない

支配者からも鬼道からも俺が守らなければ

俺は四季菜を

愛している

その気持ちに確信が変わったのはあいつの

瞳を見た時だ

自分の存在全てがああ宇宙のような瞳の中に吸い込まれてしまった

息が止まるかと思った

それ位、衝撃的だった

あいつが俺のものにならなくてもいい
俺はただ

あいつという存在を守りたい
それだけでーいんだ

月から来た少女 イナイレ 第七章

鬼道 「！（――）豪炎寺、お前―
いる？」

バスルームから戻った鬼道は豪炎寺の姿を見て少し驚いている

豪炎寺 「フツ お前だけじゃ頼りないからな、俺も泊まり込む事にした」

鬼道 「……親父さんには何て言ってきた」

豪炎寺 「臨時の強化合宿だって言ってきた

ああ、お前んちに世話になる事にしてあるから」

鬼道 「俺の事がかりで来たんだろうが、お前の方が意外にズル賢いんじゃないか？」

（ニタ）

豪炎寺 「お前には負けるさ （ニヤ）」

四季菜 「お待たせ！

豪炎寺君、サラダ出来た？あ、鬼道君もお風呂から出たんだね？」

豪炎寺 「出来てるよ」

鬼道 「豪炎寺が居たのにはびっくりしたよ、まあ 経緯は聞いたから……さ、飯食つか？」

四季菜 「 食べよう 食べよう お腹すいた〜 (^
^) いったただきまあす 」

テーブルにはチキンの照焼き、マカロニサラダ、きんぴらごぼう、
ほうれん草の炒め物 などが並ぶ

豪炎寺 「 (* ^ o ^ *) 美味しい!! 」

鬼道 「 ああ、金を払ってもいい位 美味しいぞ 」

四季菜 「 美味しいなんて言ってもらえたの、初めて…すっく
く嬉しい!! 」

豪炎寺 「 月影って何でも出来るんだな、苦手なものとかある
のか? 」

四季菜 「 ……ある… 」 (^ ^ ; ; ;)

鬼道 「 何だ、それは? 」

四季菜 「 歌が……苦手なの…その…音痴で… ¥ (/ / / /)
¥ 」

鬼道 「 歌ってくれないか? 絶対笑ったりしないから 」

テーブルにひじを乗せ組んだ手にあごをのせながら四季菜をじつと
見つめる

豪炎寺 「 俺も聴いてみたいな? 俺からも頼

む 笑ったりしないさ 」

しばらく考えてから

四季菜 「…………… ちよつとだけだよ？ 絶対笑わないですよ？」

鬼：豪 「ああ？ (*^ ^*)」

姿勢を正す

四季菜 「コホン…行きます、私の好きな曲
当ててね？」

こお…くなあ…ゆきい…まあう…きい…せえつはあ…¥ /
 / / / ¥ いっ以上です??？」

鬼道 「…………… さっぱり分からないな、どうしたらこんなに下手
に唄えるんだ…(汗)」

豪炎寺 「予想越えだったな…(汗)」

四季菜 「笑わないで、とは言ったけどそんなに酷評しなくても
良くない？ グスン(泣)

レミオロメンの粉雪…だよお (T ^ T)」

鬼道 「すまない、だが月影はもう歌わない方がいいと思うぞ」

豪炎寺 「同じく」ウンウン、

「何でその曲が好きなんだ？」

少し拗ねた顔をしながら

四季菜 「月には雪なんてなかったから…地球に来て初めて雪

を見て、感動して大好きになったんだ
れだけ！」

そ

四季菜はすごく楽しそうに笑った

く 鬼道の気持ちく

本当に愛らしいな、一言言葉を交わすだけですますます好きになって
行く

今は眼鏡をしていて瞳が見えないけれど
その顔すらとても可愛い

俺はお前の虜だー

誰にも渡したくない
たとえ豪炎寺であろうと
だが自分でも壊したくない
それほどにお前をー
愛してしまっている

まるでかぐや姫ーだな
皆かぐや姫の虜になった
だが絶対に月には帰さない
絶対にーまもって見せる

一目姿を見た皇子達は

月から来た少女 イナイレ 第八章

お風呂も入り終わり

四季菜 「じゃ、寝ますか？」

鬼： 豪 「ああ、おやすみ」(風呂上がりの姿めっちゃかわいい
い／＼／＼／＼！！！！)

豪炎寺 「鬼道、お前のベッド一人で寝るには広過ぎるな、俺も
一緒に寝てやるよ」

鬼道 「お前、見張る気だな？」

まあソファじゃかわいそうだからな、
じゃ、行くぞ」

四季菜 「あの二人…過ちがなきゃいいけど(…」

さっ寝よ」

四季菜は久しぶりにグッスリと眠れた

隣に異性が寝てる…なんてことも全くお構いなしに---

次の朝

鬼： 豪 「起きろ、月影??」

四季菜 「ふわぁぁ………って(。・1111)

お、おはよう…」

鬼道 「俺達サッカーの朝練があるから、もう出るぞ？
お前ももう起きないと、遅刻するぞ？」

豪炎寺 「理事長の娘の事は何とかなるから気にするな？」

「じゃ、行って来るな」

四季菜 「あ、ありがとう…行ってらっしゃい）・（）／

「

ふああ… 多分寝顔、ばっちり見られてんだろうなあ（恥）／／

でも何年振りだろう…朝まで一度も目が覚めずに眠れたの
昨日起きた事は夢じゃなかったんだ

友達ができた事
守るって言うてくれた事
側に居てくれる事

なんか、すごく幸せ…

そうだ、昨日疲れちゃってお母さんにメールしてなかった
さっそく報告しなきゃ

男の子と暮らすなんて許してくれるかなあ？

でもお母さんにウソはつきたくない…

正直に言おう

ふとダイニングテーブルに目をやると手作りのお弁当が置いてある
のに気が付いた

中を見てみるとミートボール、ほうれん草とコーンの炒め物、ミニ
トマト、そして少し形のくずれた卵焼きが入っていた

四季菜 「クスツ 頑張って作ってくれたんだ？」
四季菜は目にたくさん涙を浮かべてお弁当を強く抱きしめた

鬼道 「お前、俺と一緒に事考えてるだろ？」

豪炎寺 「さあな…？」

鬼道 「フツまあいい…」

まるで天使みたいだったーあいつの寝顔ー

一時限目のチャイム キーンコーン

先生 「月影はまだ来てないのか？ 誰か知ってる者いるか？」

鬼道 「先生すいません、月影から今日は遅れるって連絡を預かっていたのに僕が伝え忘れていました」

先生 「そうか、ならいい、分かった
では授業
を始めるぞ」

豪炎寺 「ボソ…そんな事言っただろ」

鬼道 「ああ、何しているんだ？あいつ…」

〔授業の終わり頃〕
ガラガラッ

四季菜 「 すいません、遅れましたハアハア……」

先生 「 連絡は来てたんだからそんなに焦らなくてもいいぞ
席につきなさい」

四季菜が席につくと

鬼道 「 ボソ…あまり心配させるな」

豪炎寺 「 ボソ…何かあったのかと思って 生きた心地がしな
かったぞ」

四季菜 「 ……」ごめんなさい…／／／」

本気で心配してくれて…何か嬉しい

〔休み時間〕

鬼道 「 何故遅れた？」

四季菜 「 昨日の事を母にメールしてたら時間かかって…」

豪炎寺 「 ……で、どこまで報告したんだ？」

四季菜 「 ……全部……」

鬼：豪 「ぜ…全部？」

豪炎寺 「おふくろさん、何て？」

四季菜 「大丈夫だった…家に二人も男の子がいるからな鬼に金棒ね、つて」

豪炎寺 「鬼はお前だな…クスッ」

鬼道 「(怒)ずいぶん物分かりがいいんだな」

四季菜 「…それと…」

鬼道 「何だ？」

四季菜 「…その…」

豪炎寺 「(^)ゞだから何だ？」

四季菜 「これは大事な事だから必ず言うつよつにつて念を押さ
れたんだけど……」

H禁止だつて/////?」

鬼：豪 「//////!!/?////」

鬼道 「あつ当たり前だ? 俺達は仲間なんだから?」

豪炎寺 「そっそっそっ?」

四季菜 「そっそっだよね?私もそう言ったんだけど……何せこ

の事をちゃんとと言うのを条件に同居を認めるって言うから……ごめんね、忘れて」

円堂 「月影っ」

四季菜 「円堂君、昨日はどうもありがとう」

円堂 「何で鬼道も豪炎寺も顔が赤いんだ？

あっそれより夏未に話したんだ、大丈夫、信頼出来るヤツだからさ、ボソ…経歴が違うのも納得してもらえたから」

四季菜 「ありがとう…円堂君 おかげで退学にならずにすんだよ」

鬼道 「彼氏の頼みなら夏未も断れないよな〜？（ニヤ」

四季菜 「円堂君、そうだったの？（（ヒューヒュー

円堂 「／／／何だよ？鬼道？ 俺と夏未はそんなんじゃないよ

だって¥（／／／／）¥」
「で、月影、サッカー部入らないか？今日から」

四季菜 「でも他の事情を知らない人に色々取り繕うのも大変だから…部活は遠慮しく

また昨日みたいに時々相手してくれればそれでいいからさ、」

円堂 「分かった、何かあったらすぐ言えよ」

四季菜 「ありがとう」

円堂は自分の席に戻って行った

四季菜 「鬼道君、豪炎寺君、」

鬼：豪 「何だ？」

四季菜 「お弁当、ありがとう 卯焼きはどっちが作ったの？」

豪炎寺 「鬼道だよ、俺ならもつと上手く作れる

俺がやるって言うてんのにこいつ、自分でやるって聞かなくてさ よっぽど四季菜に食べてもらいたみたいだぜ」

四季菜 (^^;;)(何か黒い星が出てるような…) 「鬼道君、頑張ったんだね？ ありがとうね」

鬼道 「卯焼きつてのを一度作ってみたかったただ、勘違いするな…」

四季菜 「分かってますって (^^) カワイイ)でもさ、お弁当三つ作ったって事はみんな一緒のおかずなんだよね？」

豪炎寺 「ああ、」

四季菜 「私は一緒に食べないからいいけど二人は何故おかずが一緒なの？ってなるんじゃない？」

鬼道 「実はそれを狙って作った」

豪： 四 「どういう事？」

鬼道 「俺達にフラグがたてばやかましい女子が寄って来なくなるだろう？ 言わば虫除け……だ」

豪炎寺 「だからって鬼道と俺かよ、せめて風丸とにして欲しかった」

ま、俺も虫除けはしたかったんだ、その話、乗るぜ」

四季菜 「モテ男はすごいなあ……」

～夜 六時～

鬼： 豪 「ただいまあ……！」

四季菜 「おかえり～ 部活お疲れ様、ご飯にする？ お風呂にする？」

髪を下ろしている、眼鏡も外している
な、なんて可愛いんだっ……！！

ぎゅっ／／／

豪炎寺 「… 鬼道、お前、何で四季菜に抱きついてんだ…？」

鬼道 「… だだいまの… ハグだ… ただの」

俺とした事が… うっかり抱きついてしまつとは…

鬼道 「 / / / 風呂にする 練習で体が火照ってるから、

早くシャワーを浴びたい」

四季菜 「 / / / 分かった / / /」

四季菜まで赤くなってんじゃねーか…
くそつ 鬼道のヤツ… 今まで以上に要注意だ

豪炎寺 「俺も一緒にシャワー浴びるかな、じゃ、行こうか、鬼道クン？」

鬼道 (豪炎寺のヤツ、相当怒ってるな (^ ^ ; ;))

バスルーム

体を洗いながら

鬼道 「… 何だよ？ まださっきの事怒ってるのか？」

湯舟に浸かりながら

豪炎寺 「当たり前だ、月影が勘違いしたらどうする？」

鬼道 「俺の方に向けてくれたらそれに越した事はない」

豪炎寺 「あいつは自分の誕生日までのカウントダウンに毎日怯えているんだ、今は恋愛どころじゃない、お前だつて分かつてるだろっ？」
今はちょっかいを出すべきじゃない」

鬼道 「……そうだな、分かった…気を付けるよ」

豪炎寺… お前も相当月影に本気なんだな

く リビングにて く

鬼道 「今日の飯も美味かったぞ、ごちそうさま、洗い物は俺達がやるから」

豪炎寺 「月影はゆっくりしてくれ」

四季菜 「じゃあ私みんなの洗濯物しまつて来ちゃうね？」

豪炎寺 「そんなの後で自分達がやるからいいぞ、少しは休んでるよ？」

四季菜 「私 何もしないのって苦手なの、一分一秒でも時間がもったいなくて…だから、しまつて来る」

豪炎寺 「あ、ああ」

一分一秒でも…か、いつも気が安まらないんだな
かわいそうに

洗い物も終わり、三人はソファでくつろぎながら話しをしていた
二人がけのソファに鬼道と豪炎寺、一人椅子に四季菜

四季菜 「フラグは作戦通り立ったの?…クスッ」

ブラックコーヒーを飲みながら

鬼道 「一気に広まったよ、俺達への注目度はハンパないな」

カフェオレを飲みながら

豪炎寺 「だめ押しに帰り鬼道と手をつないで帰ってやった 女
共が一気にさくっと引いて行ったな、あれは愉快だった」

ミルクティーを飲みながら

四季菜 「本当にそれでいいんですか?…あなた達…(^^;;」

「

鬼道 「何言ってるんだ? その方が月影だって他の女に嫉妬
されなくて済むだろ?」

もしかして、私のため?だとしたらそこまでしてくれるなんて…め
ちゃくちゃ嬉しいんですけど…

四季菜 「二人ともありがと…大々好き??」

四季菜は二人に抱き付いた

鬼: 豪 「 / / / ……!!」

四季菜 「やっぱ仲間って…サイコーだねっ」

鬼： 豪炎寺 「ん、ああ…」

ああ、なんていい香りがするんだ、俺達と同じシャンプーを使っているはずなのにさらにいい香りがしてくる

／／／／ ぎゅうううっっ ．／／／／

二人はここぞとばかりに四季菜を強く抱きしめた

四季菜 「バタバタッ！ 苦しいよお…二人ともっっ」

鬼： 豪 「ゴメン… ．／／／ （満足気）」

豪炎寺 「明日は久しぶりの休みだな、練習もないし、どこか行かないか？」

四季菜 「私はちょっと用事が…」

鬼道 「何？ どこに行くつもりだ？」

四季菜 「午前中は美容院に行ってこようと思って」

豪炎寺 「……その髪…切るのか？」

四季菜 「うん、バツサリと」

鬼道 「そんなに綺麗な髪、切るの勿体無いな、何故切るんだ

「？」

四季菜 「この髪は地球に来てから伸ばし始めたの…言わば生きる気力を失くしてた私の象徴みたいなもの…
でもあなた達が私に生きる力を与えてくれた、だからバツサリ切つて気持ちを新たにしたいの」

鬼道 「……なら反対は出来ないな、フツ」

豪炎寺 「午後も用事があるのか？」

四季菜 「学校からの帰り道 街を見渡せるちょっとした丘を見つけたの、そこに行つて風景画を描こうと思つて」

鬼道 「…公園を通り過ぎた辺りか？」

四季菜 「そう、そこ？」

豪炎寺 「フツ 街を見渡したいならもつといい場所があるぜ」

四季菜 「本当？ どこか教えて？」

豪炎寺 「明日連れてつてやるよ、鬼道も行くか？」

鬼道 「俺はいい、明日は自分の好きな事をするさ、」

豪炎寺 お前が月影と二人になつても大丈夫か、試す

鬼道、俺を試す気か…？

四季菜 「じゃあ明日美容院が終わったら一回帰って来るね？」

豪炎寺 「ああ、待ってる」

月から来た少女 イナイレ 第九章

） 次の日 ）

四季菜 「行って来ます」

鬼： 豪 「いつてらっしゃい」

豪炎寺 「鬼道今日はどうするんだ？」

鬼道 「久しぶりに帝国の奴等と会ってくる
あと親父の所にも寄ってくる 帰りは多分遅くなるから
飯はいいぞ」

豪炎寺 「分かった、不動達によろしくな」

四季菜 「ただいまあ」

豪炎寺 「おかえり… なんだ、髪切って来なかったのか
？」

四季菜 「眼鏡を外さないと前髪や横が切れないって言われちゃ
って……やっぱりいいですって断って来ちゃったっ？」

せっかく意気込んで行ったのに…バカだよ、私…」

豪炎寺 「……しょうがない、俺が切ってやる」

四季菜 「豪炎寺君が？」

豪炎寺 「これでも昔は夕香によくやってたんだ

大丈夫、変な風にしないから」

四季菜 「じゃあ、お願いするね」

四季菜達はリビングの床に新聞紙を何枚も広げた、大きめのゴミ袋を首の部分だけ切り取ると四季菜は眼鏡を外しそれを頭から被ったひいた新聞紙の真ん中に台と椅子を二つ置くと前に四季菜が座り後ろに豪炎寺が座った

豪炎寺はまず四季菜の腰まである髪をそつと右手の人差し指でなぞった

そして指と指の間に髪の毛を挟んで手ぐしをとかした

四季菜 「ドキッ…」

豪炎寺君に髪を触られるなんて…なんかドキドキしちゃっ…

豪炎寺は左手に髪全体を持ち替えると右手に持った霧吹きの水を髪に吹き掛けた

髪全体が濡れると霧吹きを台に置き、ハサミを手に持った

豪炎寺 「じゃあ、切るぞ」

四季菜 「はいっ！」

ジャキ、ジヨキジヨキ……ジャキ…

あっという間に髪の長さが肩の上までになった

被っているビニール袋を滑り落ち大量の髪は新聞紙に広がった

豪炎寺 「ここから揃えていくぞ？」

四季菜 「はいっ」

豪炎寺は櫛を手にとった

そして器用に櫛で毛先をとかしながらハサミで整えていった

四季菜 「すごい、豪炎寺君、上手だね」

やがて後ろが終わると横に椅子を移動して座り直した

四季菜はすぐ横に豪炎寺の視線を感じ、恥ずかしくて目を閉じた

恥ずかしかつたのは豪炎寺も同じだった

四季菜が目を閉じているのをいい事に四季菜の長いまつ毛やツンと伸びた小さい鼻、桜色の唇、同じ色した頬に見とれていた

豪炎寺 「よし、あとは前髪だけだな」

そう言うと今度は椅子を四季菜の前に移動した

四季菜は目をつむったままだった

チヨキ…チヨキチヨキ…

豪炎寺と四季菜の顔の距離が数センチしかなかった

お互いの呼吸の音が聞こえる
その音がより一層二人を緊張させた

ダメだ……もうガマン出来ねえ……

豪炎寺 「 ……キス……してもいいか……？」

四季菜はビックリした様子で目を開けた
すぐ前には豪炎寺の顔が近くに見えた

四季菜 「 ……いい……よ……」 顔がみるみる赤くなっていくのが分かった
恥ずかしくて目を閉じた

豪炎寺の唇が四季菜の唇にそつと重なった

二人は身体が溶けて行くような感覚におそわれた
自分の体温が上がっていくのが分かった

長い時間……そのままだった

やがて豪炎寺は唇を離れた
離す瞬間 チュツと少しだけ音が鳴った

豪炎寺 「 月影、俺はお前の事が……好……」

言いかけた豪炎寺の唇に四季菜が人差し指を当てた

四季菜 「 それ以上は……言わないで……」
四季菜は悲しそうな笑顔で言った

何故だー

だったら何故キスさせたんだ？

俺がそんなにモノ欲しそうな顔をしていたのかー？

お前に答えを求める事は出来ないのかー

豪炎寺 「……………分かった……………」

聞きたい事はたくさんあるのにこう答えるのが精一杯だった

ごめん、豪炎寺君…今の私はあなたの期待に応えられないー
キスなんてしなければー

でもあの時ー

私もキスしたい気持ちを抑えられなかった

矛盾してるよねー？

ほんと ごめんー

二人は無言のまま片付けた

〈 帝国学園 〉

佐久間 「 鬼道 ？ 鬼道じゃないか ？ 」

源田 「 久しぶりだな、元気だったか？ 」

不動 「 よう、鬼道くん、今日は何しに来たんだ ？ 」

鬼道 「 お前達 明日は木戸川清修とここで練習試合だろう？
言わば陣中見舞いってとこだ 」

不動 「 わざわざそんな来なくたって
木戸川なんか俺達の相手じゃねーっての 」

鬼道 「 フツ 　　あまり相手を見くびらない方がいいぞ、
不動、あの三兄弟は新たな技を身につけたらしいからな 」

辺見 「 なら練習に参加してくれるか？ 」

鬼道 「 ああ、そのつもりで来た 」

〈 四季菜の部屋 〉

コンコン （ドアのノック音）

豪炎寺 「 風景画、描きに行くのか？ 」

四季菜 「う、うん……案内してくれる？」

ドア越しに会話する二人

豪炎寺 「じゃあ後10分位で出るぞ？」

四季菜 「…分かった」

四季菜はその間に急いでおにぎりをにぎった

豪炎寺が部屋から出て来た

豪炎寺 「行くぞ」

四季菜 「うん」

歩きながら――

豪炎寺 「荷物それだけでいいのか？」

四季菜 「今日は鉛筆書きのスケッチしかないから」

豪炎寺 「そっちの荷物はなんだ？」

四季菜 「おにぎり作って来た、着いたら食べよ」

豪炎寺 （10分しかなかったのに急いでにぎってくれたんだ、
ありがたいな）

20分後、二人は鉄塔広場に着いた

豪炎寺 「どうだ？ここから眺める景色は？」

四季菜 「すごい？ 街全体見渡せるじゃん！
とう、豪炎寺君！」

豪炎寺 「そんなに喜んでくれるとはね、連れて来て正解だったな」

四季菜 「あそこのベンチでおにぎり食べよう」

豪： 四 「いただきまーす」

豪炎寺 「モグモグ……うん、美味しい！」

四季菜 「良かった、いっぱい食べてね？飲み物はここに置いとくよ」

豪炎寺 「じーーーーっつ

四季菜 「なっなに見てんの？ / / / /」

豪炎寺 「やっぱりお前が好きだわ」

四季菜 「あーっつ？ 言っただけっつ？
言わないでっつ言っただけっつかじゃん？」

豪炎寺 「もう分かっている事なんだから、口に出したって出さな

くたつて一緒だろ？
それにお前が応えられないのも分かるからさ、気にしなくていいよ
？」

四季菜 「…私の気持ち、分かってくれるの？」

四季菜の頭をそつと撫でて

豪炎寺 「ああ、」

四季菜は申し訳なさそうにおにぎりを食べた

四季菜 「さあて、じゃあ描こうかな

豪炎寺君はどうするの？」

豪炎寺 「俺はここで特訓する（ニコッ）」

豪炎寺はそう言うのと持って来たサッカーボールを出した

そして大きな木の下に行くとその木の枝にロープで結び付けてある
大きなタイヤに手を置いた

豪炎寺はタイヤから少し離れるとタイヤの穴目がけてボールを力強く蹴り上げた

ドガアアアアアァーッッ

サッカーボールはタイヤの穴を通り向こう側の木に跳ね返って豪炎

寺の元まで戻って来た

四季菜 「すっすごい！！タイヤの穴を通すのだったって至難の技なのに、その通ったはずのタイヤが全く揺れていないなんて……
豪炎寺君、やっぱりあなたは天才ストライカーね！！」

遠くから

「おお〜い！！」

円堂が階段をのぼって二人の所まで走って来た

円堂 「なんだ、ここにいたのか、捜したよ」

豪炎寺 「どうしたんだ？ 円堂」

円堂 「せっかくの休みだから月影とサッカーしたいと思ってさ

家にも行ったし、河川敷にも行ったんだぜ？

月影、サッカーやるうぜ？」

四季菜 (^^;; 夏末さんとデートとかしないん

だ…さすがサッカー馬鹿だな)

「うん、」

円堂 「豪炎寺、さっきの見たぞ、やっぱりスゴいなあお前、タイヤに全く触れずにボールを通すなんて！！
そくだ！ 月影もやってみたらどうだ？」

四季菜 「うん、面白そう、やってみる」

四季菜はボールをタイヤの数メートル前に置くと右足のつま先で軽く触れてボールに回転をかけた
そのまま勢いよく蹴り込んだ

ズバアアアーツ！

だがボールはタイヤの穴の中心を少し外してしまった
タイヤのへりにボールは勢いよく当たるとさらに加速して四季菜の方に跳ね返って来た

四季菜 「しまった！！こっちに戻って来る？」

豪炎寺 「?? このままじゃあいつの顔に当たる??？」

その時だった

円堂 「ハアアアーツツ！！ ゴッドハンドツツ！！」

ピシユウーウーウウ……

ボールは円堂の手の中におさまった

四季菜 「……………！！……………すごい……………こんな一瞬の間に力を最大限に出せるなんて……」

四季菜は世界一のゴールキーパーとエースストライカーの凄みを改めて感じさせられた

四季菜 「参りましたっつ？」

円： 豪 「地球人をなめんなよ？（笑）」

四季菜はその後風景画をスケッチし、円堂と豪炎寺はシュートとキヤッチの練習をした

三人とも日が暮れるまで夢中で続けた

円堂「じゃあそろそろ、帰ろうか？

あれ、月影、髪切った？」

四季菜「（^^;;）今聞く？）今日豪炎寺君に切ってもらったの、どう？上手でしょ？」

円堂「ああ、豪炎寺はほんとに器用だな、月影、その髪型、似合ってるぞ（ニカッ）」

四季菜「ありがとう…」

四季菜はまたキスの事を思い出してしまい、顔を赤らめた
だか夕陽のおかげで二人には気付かれなかった

四季菜「豪炎寺君、ご飯 何食べたい？」

円堂「なんだ、豪炎寺 月影の家で飯食ってくのか？」

豪炎寺「一緒に住んでるからな」

円堂「え〜っつ？ マジ〜？ 鬼道だけじゃなかったのかよ？」

豪炎寺 「 鬼道だけじゃ何するか分からないからな ?

(俺の方が何かしちゃったけど……)

円堂 「 ? 何するかって、何を? 」

豪炎寺 「 相変わらず鈍いやツだな、鬼道が月影に手を出したらどうするって事だよ? 」

円堂 「 …… / / / / ア、アハハハ…… / / / 意味分かった
… でもまだ中学生だぜ? そんな事しないよ? 」

豪炎寺 「 こう言っちゃなんだが、鬼道も俺もとつくに……ハッ
? 」

円堂 「 とつくに……何だよ? 」

豪炎寺 「 …… ¥ (/ / / / ¥ …… いや、何でもない 」

(月影が側にいるの忘れてた)

四季菜 (オトナになっちゃってるのね…… (^ ^ ; ;))

鬼道も俺も言いよって来た女を幾つかつまみ食いした事がある
最初の相手もそうだった二年の時、一つ上の先輩だった
俺にとっては初めての相手なんてどうでも良かった
ただ早く童貞を捨てたかっただけだった
鬼道もおそらくそうだろう

だが自分の好きになった女には俺が初めてで居て欲しい

ワガママかもしれないけど、そうなんだー

月影——お前は——どつなんだ——？

月から来た少女 イナイレ 第十章

円： 豪： 四 「いただきますあす」

円堂 「この唐揚げつつま 美味しいよ、月影」

四季菜 「良かった、おかわりたくさんあるから遠慮しないで食べてね」

たくさんあつたはずのご飯はあっという間に無くなった

円堂は予想以上に食べた

円堂 「あゝ？ お腹いっぱい？ ご馳走様？

豪炎寺も鬼道もいいよな、こんなに美味しい飯が毎日食えるなんてさ、

「
豪炎寺 「フツ 何言ってるんだ、お前のおふくろさんの料理だつて十分美味しいじゃないか？」

円堂 「まあそうなんだけどな、ニヒヒ……」

「よし、これで明日の休日特訓も頑張れるな！！
月影、明日練習してるとこ、見に来ないか？」

四季菜 「私は今日描いたデッサンに色入れをしたいから遠慮しとくね、多分今日の夜からアトリエにこもるから」

鬼道 「ただいまあ……」

円： 豪： 四 「 おかえりい！！ 」

鬼道 「 なんだ、円堂来てたのか？ 」

円堂 「 昼間鉄塔広場で会ったんだ、で遅くまで居たからそのまま夕食の招待をつけてさ 」

鬼道 「 ……そうか、

? ……月影ずいぶんと短くしたな？ 」

四季菜 「 ……どう…かな？ 」

円堂 「 豪炎寺が切ったんだってさ 」

鬼道 「 ほう、豪炎寺が…ふーくん、まあ似合ってるんじゃないか？ 」

四季菜 (^^ ; ; 何この見透かしたような顔)

円堂 「 じゃあ俺、そろそろ帰るわ、お前らまた明日な

月影、ご飯ご馳走さんな 」

鬼： 豪 「 明日な？ 」

四季菜 「 私じゃあ、先にお風呂入って来ちゃうね？ 」

鬼： 豪 「 ああ、 」

バタン、パタパタ…四季菜はバスルームへ行った

鬼道 「お前、あいつの髪切ってやっただけか？」

豪炎寺 「フツ…他に何かある？」

鬼道 「フンツ まともに答えられないのが何よりの証拠だな、抑えがきかないのはお前の方じゃないのか？」

豪炎寺 「実はキスして告白した」

鬼道 「やっぱりだな、で？月影は何て？」

豪炎寺 「俺の気持ちには応えられないってさ、何でキスさせてくれたのかは知らないがな……」

鬼道 「そうか……」

あいつもキスしたくなったのかもしれないな、きっと……」

四季菜がアトリエにこもってから六時間が経とうとしていた

四季菜 「ふう、もう三時か、少し休もうかな、」

四季菜はアトリエにあるソファに座りひじ掛けに横になった
両手は汚れているので前に垂らしていた

「少しだけ……」

四季菜はうとうとし始めた……

夢を見ていた

やさしい顔をした父親が四季菜に向かって両手を広げてくる

父親 「四季菜…こっちにおいで…」

四季菜 「お父さん…!!」

四季菜は一生懸命走って父親の腕に抱かれる

次の瞬間――

父親の体中のあちこちから大量の血が吹き出してくる

父親の表情はみるみる歪み始め、ゾンビのような顔になってゆく

四季菜 「きゃああああーっ??？」

四季菜に大量の血が降りかかる

「お父さんっつ!!!!」

四季菜は目を覚ました

目の前にはアトリエが広がっている

四季菜 「…お父さん…また、この夢…」

四季菜はいつもこの夢にうなされていた

絶対彼奴を許さない――あんな人殺しがのうのと別世界で生き
ているなんて――

許されるはずがない

どうしようも無くなった時には

私が彼奴を

名月 静二を

殺してやるー

四季菜は覚悟を決めていた

二時間程しか眠っていなかったが四季菜は寝るのをやめた
今すぐ眠ってもまた夢の続きを見そうな気がしたからだ

そつだ、お弁当作ろう

四季菜は手を洗った

く 朝 六時 く

ピュピュ

目覚ましが鳴った

鬼道が止める

鬼道 「起きろ 豪炎寺、朝だぞ」

豪炎寺 「んっ？……ああ……」

二人とも寝起きがいいのですぐ起きた

着替えて部屋から出るとダイニングテーブルに目が行った

鬼道 「弁当がある」

豪炎寺 「ありがたいな」

二人は四季菜にお礼を言いたくて四季菜の部屋をノックした
返事はない

ドアを開けてみた

四季菜の姿はない

まさかまだアトリエにー？

二人はアトリエのドアを開けてみた

四季菜 「ー？ おはよう？」

四季菜は色をぬっていた

豪炎寺 「まだやっていたのか？」

鬼道 「集中して描き上げたいのは分かるが、あまり無理するな
」

四季菜 「あと少しでやめるから、心配しないで？」

鬼： 豪 「分かった：弁当、ありがとな？」

パタンッ

四季菜は二人が出掛けたのも気にもとめず、ひたすら絵に没頭した

四季菜 「：やったあ、出来たあ……」

四季菜は自分の絵に大満足だった

＼ 雷門中サッカー部グラウンド 〉

豪炎寺 「新しい技を覚えられそうなんだ」

円堂 「そうなのか、なら協力するぜ？」

鬼道 「俺達ももっと攻撃の範囲を広げてそれに見合っ動きをマスターするぞ！」

闇野： 松野： 穴戸： 半田 「おおっ！！」

風丸 「俺達DF陣も負けてられないぞー！」

栗松： 影野： 壁山 「おおっ！！」

豪炎寺 「染岡、俺にシュートを打ってくれないか？」

染岡 「お安い御用だぜ？」

染岡 「行くぞっ？ ワイバーンククラッシュュ！！」
ズガアアアアアアアアアッ！！

豪炎寺 「マキシマム……ファイアーッ？」
ズドゥーゥーッッ！！ シュウウウー……………

ボールはゴールを大きく外れて行った

豪炎寺 「 どんどん打ってくれ! 」

染岡 「 ああ、容赦なくバンバン行くぜ! 」

） 休憩時間 ）

春菜 「 みなさ〜ん!!! 休憩時間で〜す!!!
お昼ご飯も食べちゃって下さ〜い!!! 」

秋 「 おにぎりもあるわよー! 」

冬花 「 サンドイッチもありますよ〜! 」

鬼道 「 俺は弁当を持って来たからいい、 」

豪炎寺 「 俺もだ 」

秋 「 またお揃いのお弁当なのかしら? (^^;:~:~:~)」

春菜 「 まさか…お兄ちゃんに限ってそんな… (^^;:~:~:~)」

二人はお弁当のフタを開けた

それぞれ違うおかずが入っていた

ご飯もそぼろ、ピラフと全く別のものが入っていた

秋: 春 「 ホッ… 」

鬼：豪 「あいつ…フッ」

鬼：豪 「ただいまあー！」

シー—ーン

鬼：豪 「？」

リビングに入るとソファで四季菜がうたた寝をしていた
キッチンにはシチューらしきものが煮込んであった

豪炎寺 「火をかけっぱなしじゃないか？
危ないな」

豪炎寺は急いで火を止めた

鬼道 「フッ だから心配してしまっただ」

鬼道は四季菜の隣りに座った

そして四季菜の頬を人差し指でそっと撫でた

豪炎寺 「……鬼道 ！！？」

鬼道 「はいはい、分かったよ」

鬼道と豪炎寺はバスルームへ向かった

何だか顔がくすぐったいー

四季菜は目を覚ました

目の前に鬼道と豪炎寺の顔があった

鬼道と豪炎寺は四季菜を挟むようにソファに座っており、お互いの手で四季菜の頬を触っていた

四季菜 「 ¥（／／／／） ¥……な、何ですか？……」

四季菜は二人から離れた

鬼道 「 お前の肌って赤ちゃんみたいだな？」

豪炎寺 「 触ってて気持ち良かったぞ 」

四季菜 「 人が寝てる時に触って来るなんて、ヒドい！／／／／／
／／ 」

鬼道 「 起きてる時ならいいのか？ 」

四季菜 「 そ、…そういうワケじゃ……／／／ 」

鬼道 「 火をかけっぱなしで寝ていたお前が悪い、さ、飯食つぞ
？」

四季菜 「 『じ…じめん…』 」

どうしようー
どんどん二人の事
好きになりそうー
ヤバイ
抑えなきゃー

鬼道 「パク…
それで、絵は完成したのか？」

四季菜 「うん…それでね、今回はコンクールに出してみようと思っの…」

豪炎寺 「いいじゃないか、
お前、少しずつ…変わっていつてるんだな…
安心したよ」

四季菜 「パク…
二人こそ、今日の練習はどうだったの？」

鬼道 「俺はもっと攻守の範囲を広げられるように瞬発力の練習を多めにしたかな？」

豪炎寺は新たな必殺技が完成しそうなんだろう？」

豪炎寺 「今日は染岡に相当シュートを打ってもらってシュートチェインで出す練習をしたんだが、何か、物足りなくてなかなかゴールに入らないんだ、何が物足りないのかまだ良く分からないんだ

が、……」

四季菜 「……………そのボールが入らない時はどの方向に跳んで行つてる？」

豪炎寺 「 ……二時の方向ばかりが多いかな？

何かあるのか？
モグモグ……」

四季菜 「 回転がかかり過ぎているのかも知れないわね……良かつたら明日朝早く私と練習してみる？」

豪炎寺 「 あ？ ああ」

四季菜 「 じゃあ六時に家を出るよ！」

鬼道 「 何か考えがありそうだな…？」

また夢を見ていた

父親 「 四季菜、こっちにおいで！」

四季菜 「 お父さん！！！」

ブシャアアアアー

四季菜 「 ひっ？ いやああーッ！ お父さん？」

鬼道 「おいっ！すっかりしろっ！月影っっ！！」

四季菜 「…はっ？…」

鬼道 「どうしたんだ？すごくうなされていたぞ……お父さんって言うていたな、親父さんの夢見たのか？」

鬼道は四季菜のベッドまで様子を見に来ていた

四季菜 「ハア……いつもこの夢見るの……でも何で鬼道君ここに？」

四季菜はベッドから上体を起こすと時計を見た
時計は午前1時になるうとしていた

鬼道 「明日の予習をして起きていたら 隣の部屋からお前のうめき声が聞こえたんでな
様子を見に来たらお前がうなされてたから
……大丈夫か？」

鬼道は四季菜の隣に座った

鬼道はゴーグルを外していた
四季菜は初めて鬼道の瞳を見た

鬼道君でいつも冷静だから青い瞳かと思ってた
こんなに情熱的な赤い瞳だったなんて

四季菜 「 / / / / ありがとう…もう大丈夫だから」

ぎゅーっ

鬼道は震える四季菜を強く抱きしめた

鬼道の吐息が四季菜の肩にかかる

四季菜 「 ……鬼道く……ん？ / / / / 」

鬼道 「 何もしない、お前が眠れるまでこうして抱いてやる、だから安心して寝ろ」

四季菜 「 ……！！！！！！……」

鬼道はそのまま四季菜を優しく倒すと一緒にベッドに入り四季菜と向かい合わせになった

右腕を伸ばすと四季菜の顔の下に置いて腕まくらをした

左足を四季菜の両足に這わせ左手で四季菜の髪を優しく撫でた

何度も何度もリズムを取るように優しく撫でてくれた

四季菜は右耳に幸せを感じていた

リズム良く撫でてくれる優しい手が耳に少し当たって来るからだった

四季菜は両手を鬼道の胸に当て自分からもう少しくつついた

鬼道は撫でていた髪から四季菜の肩甲骨の辺りまで下がり今度は背中を優しく撫で始めた

四季菜はHな気持ちになんて全くなかった

夢の中の優しいお父さんに抱かれている気になった

そのまま安心して小さな寝息をたてはじめた

） 鬼道の気持ち ）

かわいそうに、こんなに震えて

こんな広い家で毎日こんな思いをして眠っていたのか

俺が少しでも癒やしてあげられるならそうしてやりたい

お前を幸せにしたい

好きだー月影四季菜ー

お前だけを

愛しているー

眠り始めたこいつに

俺は優しくキスをしたー

こいつの唇は予想以上に柔らかくて程よい湿り気があった

俺は自分を止められなかった

唇をくつつけては離し、離してはくつつけ、何度も何度もキスをした

クスツツ 眠っているんだから、これ位、いいよな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8583y/>

月から来た少女 イナイレ

2011年11月29日01時54分発行